

福島第一原発事故の時、自衛隊や東京消防庁の放水作業は、マスコミで大々的に報道されました。しかし、当時の吉田昌郎所長（故人）と一緒に免振重要棟に残って、死を覚悟して復旧活動をした、作業員の姿はほとんど報道されていません。自衛隊や東京消防庁には広報担当があって、自分達に都合の良いことは、積極的にマスコミに情報を提供し、都合の悪いことは、公文書を改ざんします。しかし、作業員達には広報担当はいないので、ほとんど報道されません。

福島第一作業員の実態 いわき市の反原発団体資料保管 40 年前 101 人から聞き取り

「東京電力福島第一原発で約 40 年前に働いていた作業員らの家を訪問し、労働環境や健康状態を聞き取った貴重な調査が保管されていたことが分かった。それによると、当時は名義貸し、替え玉健康診断、労災隠しのほか、多重下請け構造での給料の中抜きなどが横行していた。調査を読んでもみると、一部改善された点もあるが、現在もそのままだの問題が少なくない。調査をした団体は「作業員使い捨ての実態は（今も）同じ。安心して働ける環境を」と訴えている。（片山夏子）

■**他人名義で入城** いわき市の 21 歳男性は「後輩は 17 歳で働けないので、18 歳の人の住民票と名前を借りて入った」と証言。同市の 45 歳男性は「健康診断で不合格になったが、合格した人が自分らの名前で受け、合格した形をとった」と話した。健康診断すら替え玉という例も少なくなかった。

■**労災隠し** いわき市の 21 歳男性は作業中、指を切ったが隠すように言われた。「事故は結構多い。でもけがをしてめっかると色々聞かれる。会社にしてみれば、めっかるとやばい、仕事がもらえなくなるから隠せる程度のは隠してということだ」。都路村（現田村市）の男性は「同僚が原子炉建屋で手をつぶしたが、労災にならなかった。」川内村の 51 歳の男性は「福島第二でけがしたが親方が日当と医療費を払い、労災にならなかった。10 日程度のけがはほとんど握りつぶされる」と述べた。

■**過酷な作業②** 濃縮廃液タンクの足場掛けなどの作業をした地元の 56 歳男性は「放射線量が高くて、夢中で作業したが、すぐに線量計が鳴りっぱなしに。汗が口の周りにたまって苦しくて、マスクを取ったことがあった。1 日 3 回入り、150 ミリレム（1.5 ミリシーベルト）以上浴びた日もある」と証言。男性は 4 カ月後、食欲が落ち、倦怠感がひどくなり仕事を辞めた。調査当時は生活保護を受けていた。

浪江町の 55 歳男性は、配管のひび割れに鉛をかぶせ補修する作業で、1 日に 3 ミリシーベルト以上被ばくした。高線量廃棄物を切断し、ドラム缶に詰める作業も線量が高かった。「線量計のアラームが鳴っても親方に怒鳴られ、みんな作業しているし出にくくて作業を続けた。被ばく線量限度に達すれば働けなくなる。すると食えないから、他人になりすましたり、ごまかす」。当時は線量記録が手書きだったため、計画線量を超えても超えなかったように低く書かされた

作業員もいたという。」(「東京新聞」18年8月26日付け)

【桜の木の下を行く作業員(福島第一原発)「AERA」18年3月12日号】



【全ベータ放射能分析をする作業員(福島第一原発)「AERA」18年3月12日号】

